

# 「受給動詞の史的変遷」

米 澤 昌 子

## I、はじめに

日本語特有の表現の一つに、物の授受関係を表す表現がある。その際に用いられるのが受給動詞<sup>①</sup>である。人称上の制約・視点・話し手の関与などから数多くの研究が行われているが、専ら共時的な観点から論じられることが多いようである。だが、語の確固たる性格づけを行うためには、その語が持つ歴史を明らかにする必要がある。本稿では先行研究を踏まえながら、各受給動詞の語義とその表現の持つ機能の史的変遷を捉え直すことを試みたい。話し手の視点、事柄の捉え方を中心に受給動詞を特徴づけている要因の一つである待遇意識についても考察を加え、再検討するものである。というのも、「敬語」分野で指摘される絶対敬語から相対敬語への敬語の変遷と受給動詞の発生、発達が非常に深い関係にあるからである。受

給動詞側からの敬語史の位置付けの可能性を探る意味でも、受給動詞の史的変遷を把握しておくことは重要であると思われる。

## II、受給動詞とは

物の授受関係を表す際に用いられる受給動詞には、「やる／くれる／もらう」の三語があり、それぞれに敬語（謙讓）形が存在し、三列七語の体系となっている。また、それぞれ補助動詞としても用いられるが、その場合、授受関係の対象となるのは具象物ではなく、形としては存在しない行為である。以上を表にすると次のようになる。

補助動詞		本動詞	
謙讓体	普通体	謙讓体	普通体
〜てあげる	〜てやる	あげる／さしあげる	やる
〜てさしあげる		くださる	くれる
		〜てくれる	いただく
		〜てくださる	〜てもらう
			いただく

話し手は（AからBへの物（行為）の移動）の移動を次の三つの表現を用いて述べることができる。

- ① AがBにやる。 (A側に立った表現)
- ② AがBにくれる。 (B側に立った表現)
- ③ BがAにもらう。 (B側に立った表現)

逆に言えば、この三つの表現から（ ）に示したように話し手が自身をどちら側において授受関係を捉えているかがわかるわけである。この話し手の視点やAやBにくる人称上の制約については、宮地（一九六五）、大江（一九七五）、久野（一九七八）などの論考がある。ただし、話し手の事柄把握の時点での恩恵意識や敬語表現の関

連性について、つまり受給動詞の敬語形まで含めては十分には論じられてはいない。

### Ⅲ、先行研究

受給動詞を史的変遷によって捉えたものに、古川（一九九五）、主に補助動詞の発達状況を捉えたものに、宮地（一九七五）（一九八一）がある。まず、これらの研究について概観しておく。

#### Ⅲ、(1) 古川（一九九五）

古川は「やる」「くれる」について平安から中世末期までの文献を対象に調査し、「くれる」の持つ視点制約の変遷を中心に考察し

	「くる」	「やる」
平安	=与える① A → B ○ ▲	
		=送る =行かせる
鎌倉	=与える① A → B ○ ▲	=与える A → B } 新出 ○ ▲
	=与える②(くれる) A → B } 新出 ○ ▲	
室町	=与える① A → B } 衰退 ○ ▲	=与える A → B } 増加 ○ ▲
	=与える②(くれる) A → B } 増加 ▲ ○	
中世末期		=送る =行かせる
		=与える A → B } 安定 ○ ▲
	=与える②(くれる) A → B } 安定 ▲ ○	
		=送る =行かせる

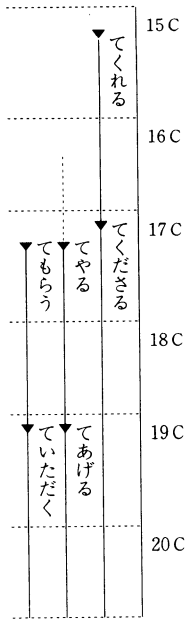
○：視点のある側 ▲：主語

て、図表にまとめている。

図のような結果から「くれる」は古くは、与え手の視点から述べ、しかも受け手の多くが、低い身分の者や動物であったが、鎌倉以降そういった制約はなくなつたとしている。これには「やる」の用法拡大が関係しており、物を与える側という固定した視点をもつ「やる」の侵食を受けたためであると述べている。

### Ⅲ、(2) 宮地（一九七五）（一九八一）

宮地氏は敬語あるいは待遇表現から、最も精力的に受給動詞の研究を試みられている。近代敬語の古代敬語と違う特徴は、「〜て（さし）あげる／〜てくださる／〜ていただく」という受給補助動詞の発達・頻用を導く場面的恩恵授受の意識であるとしている。さらに、受給敬語表現の発達状況を次のような略図で示し、一七世紀中頃までに、「〜てくれる／〜てやる／〜てもらう」が出そろい、その敬語（謙讓）形はそれぞれ約二世紀後に発生し、一九世紀中頃までに全部出そろつたと指摘されている。



「受給動詞の史的変遷」

古川（一九九五）は受給動詞の「やる」「くれる」の二語のみ、宮地（一九七五）は補助動詞のみに関する研究である。本稿では、受給動詞を体系的に捉えるべく、各々の本動詞、補助動詞の普通体、及び敬語（謙讓）体を含めた計一四語に関して、古川（一九九五）の調査法を参考に、それぞれの意味領域を上代から現代までの文献を対象に調査した。『万葉集』（八世紀後半）から『斜陽』（二〇世紀中頃）までの約一世紀間に亘る変遷を概観する。

### Ⅳ、「やる」「〜てやる」の史的変遷

#### Ⅳ、(1) 奈良・平安時代の「やる」

奈良時代は文献も限られているので、今回の調査では、『万葉集』のみを対象とした。

1 わが背子を大和へやりてまつしだす足柄山の杉の木の間か

（『万葉集』一四・三三六三）

2 海神の手巻の玉を家づとに妹にやらむと拾ひ取り…

（『万葉集』一五・三六二七）

3 今は和泉守の妻にてあたりけるがり、文やる。げにいと香ばしき笛あり。包みてやる。

（『落窪物語』巻一）

『万葉集』では1のように、遠くの方へやる意で「人を行かせる・文を送る」という用例が多い一方、2のように、授受関係も意味す

る用法も見られる。古川（一九九五）は、「やる」は平安時代には、まだ一般的な物のやりとりで使用されていなかったとするが、既に奈良時代に物のやりとりに使用されていることがわかる。ただ、2・3から考えても話し手（書き手）に意識されているのは、物を与えるという恩恵よりは、相手との物理的距離感であると言える。遠く離れた相手に物を贈る、送るを意味しているようである。奈良・平安時代の「やる」は自分から離れた場所へ、「人を行かせる・文を送る」という用例が授受関係を表した用例より圧倒的に多いのようなすけよう。

IV、(2) 鎌倉・室町時代の「やる」

「やる」は大体が前代の用法を受け継ぎながら、一方で意味領域を広げて行く。

4 「いかで。鉢をやりてこそうけめ」とて、人々制しとゞめけり。  
 【宇治拾遺物語】一七二

5 牛を売る物あり。買ふ人そのあたひをやりてうしをとらんと  
 いふ…  
 【徒然草】第九三段

6 宗盛（略）この三人を呼び出ひて、暇をやるぞ…  
 【天草版平家物語】三二

これらは目の前にいる相手に対する発話であり、距離感からの解放が見られる。また「暇」など具象物ではないものの授受の表現にも

使われるようになっていく。

IV、(3) 中世末期以降の「やる」

【大蔵虎明本】の狂言台本では、現代語「やる」と同じ用例が多く見られる。

7 (売り手↓買い手)…おそかつたによつて、(略)そなたへやる事はならぬ。  
 【大蔵虎明本】雁盗人

8 (太郎冠者↓大名)…何と仰せられてもこなたでは有りますまひ、やりまらずまひ  
 【大蔵虎明本】純根草

7は売り手から買い手へ、8は家来から殿様への発話であり、受け手が与え手の目下の際に用いるという現代語「やる」に見られる制約はないと言える。ただ明らかに身分の上の者に対しては用いなかっただようである。8の場面で売り手は先に大名に対しては、次のように答えている。

9 大名…売るべひか  
 売り手…あげまらせうず  
 【大蔵虎明本】雁盗人

目下に対して用いるという待遇意識がはっきりとしてくるのは近代以降であろう。

なお、「いとまをやる」で夫が妻を離縁するという意味で用いられている例もある。

10 男…おや里へまいつて御ざる程に、其ま、いとまをやつて御

ざる

〔大蔵虎明本〕因幡堂

15 とらへたる人を見知りたれば乞ひゆるしてやり給。

〔宇治拾遺物語〕一五七

IV、(4) 奈良時代の「てやる」

行為の授受関係を表す用法は見られない。ただ、次のような複合動詞「動詞+やる」の後項成分としての「やる」が見られる。

11 春されば百舌鳥の草ぐき見えずとも我は見やらむ君が辺をば

〔万葉集〕十・一八九七

距離を示す以外に、授受関係を示すようになる。

12 沖辺より船人のぼる呼び寄せていざ告げやらむ旅の宿を

〔万葉集〕一五・三二六四三

16 (酒屋↓買い手)…それならばつめてやろう

〔大蔵虎明本〕千鳥

11は動作が、その動作主体から遠くへ向かってなされることを表しており、本動詞同様に、距離を意識した語である。ただ、12は現代語「てやる」とも解せるものである。日本古典文学大系『万葉集

17 (茶屋↓客)…かんだぎの渡守が秀句にすひた程におしへてやらふ

〔大蔵虎明本〕薩摩守

四〕ではこの語に対し「つげてやろう」という注釈がなされている。今回は、助詞「て」のつく補助動詞「てやる」という語形のみを対象としたが、今後、この複合動詞の後項成分として用いられる「やる」も対象とすべきであると思われる。

あてつけがましく何かをする、意味でも用いられ、用法を拡大していく。

IV、(5) 平安時代から室町時代の「てやる」

13 (中納言ハ)「さるべき受領あらば(娘ヲ)知らず顔にて、くれてやらむとしつるものを」

〔落窪物語〕卷一

18 やらぬに因りて、盗みにわせた物じや、さんさんなぶつてやらふと存ずる

〔大蔵虎明本〕益山

14 「くひ物はおちてきたるか、くはせてやれ」

〔宇治拾遺物語〕九六

IV、(7) 近世・近代の「てやる」

〔浮世床〕

20 「もう沢山か、沢山でなけりや、まだ撲つてやる。」

(「坊っちゃん」)

行為の授受を恩恵的に表現する一方で、近世以降受け手に對して不利益になること、あるいは話し手の強い意志を表す用法が増えている。

以上、授受関係を表現する「やる」は奈良時代、「してやる」は中世ごろから見られることがわかった。話し手の視点は常に物、動作の与え手側にあり、古くは距離感を重視した語であったが、現代語「やる」の持っている待遇意識による、目下の受け手に對して用いられるという制約はなく、制約が近代以降のものであることがわかった。

### V、「あげる」「してあげる」の史的変遷

V、(1) 奈良時代から室町時代の「あげる(あく)」  
21 ……よき白袴の袖まき上げて猪鹿待つわが背

(「万葉集」七・二二九二)

22 から歌、声をあげて言ひけり。(「土佐日記」二月二六日)

23 修験者は、(略)各々僧伽の句共あげ、…

(「平家物語」卷三)

右のように授受関係を表現する用法は見られず、多くが21のように

下から上への移動を意味す。ただ、22・23はともに、声を高らかに出す意であるが、23は経を唱えることを示していることに注意したい。さらに室町期になると、

24 両社にて、馬あげさせられけり。

(「増鏡」)

のように、神に對して奉納する意で用いられだすことも「あく」が受給動詞となつていく流れを捉える上で、注目すべきである。

V、(2) 中世末期の「あげる(あく)」

ようやく授受関係の「あげる(あく)」が登場するが、現代語よりも受け手に對する謙讓の意が強く、「献上する」というような意味を表し、ほとんどが、「年貢をあげる」という形で見られる。

25 そなたは、みねんぐうに何をあげさせらるぞ。

(「大藏虎明本」筑紫の奥)

V、(3) 近世・近代の「あげる」

近世以降用例が増えるが、近代でもまだ「やる」の丁寧語的な用法はない。

26 お出なすつたら(コノ手紙を)上げておくんままし。

(「浮世床」)

27 お小遣いがないとお困りになるだろうと、為替で十円あげる。

(「坊っちゃん」)

V、(4) 奈良時代から中世末期の「してあげる(あく)」

中世末期に至るまで、行為の授受関係を表現する用法は見られない。ただ、敬語表現である、「申し上ぐ」などの用例が見られる。

28 少将も涙に咽で申しあぐる旨もなし。〔平家物語〕卷二

V、(5) 近世・近代の「てあげる」

近世に入り、ようやく行為の授受関係を表現する「てあげる」が見られる。

29 サア 今渡してあげましやと言えども渡す金はなし。〔冥土の飛脚〕

30 ……あとから持たしてあげるからとつかひを返し…

〔安愚楽鍋〕

以上、受給動詞の「あげる」は中世末期、補助動詞「てあげる」は近世に発生したと思われる。その登場は、普通体「やる」「てやる」から遅れること、本動詞で約九世紀、補助動詞で約四世紀である。ただ、「経をあげる・神に奉納する」という用法は平安末期から既に見られた。この用法が身分の上の者に対して差し出すという、受け手に対して自らの行為を謙っていることを表現しようという意識の表現につながるものと思われる。話し手の視点は「やる」同様常に与え手側にある。一方「あげる」の待遇意識に関しては現代、とりわけ、戦後でもこの数十年間に変化が伺える。もはや現代語「あげる」は謙讓表現ではなく「やる」の丁寧語である

と見えよう。この待遇意識の変化を昔話の「桃太郎」の歌に見ることができる。

31 やりましょう やりましょう これから鬼の征伐についてくるなら やりましょう

戦後、この「やる」はぞんざいな表現であるとされ、音楽の教科書審議の場で議論をよんだ。

32 あげましょう あげましょう

若い年代にはこちらの歌詞で受け入れられているようである。

現代においてもなお受給動詞における待遇意識は変化を見せている。

VI、「さしあげる」「てさしあげる」の史の変遷

VI、(1) 奈良・平安時代の「さしあげる(ささぐ、さしあぐ)」

『万葉集』では「さしあげる」は見られず、「ささぐ」という語形のみが見られる。

33 ……諸人のおびゆるまでにささげたる幡のなびきは…

〔万葉集〕二・一九九

34 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ぎて行かむ

〔万葉集〕二十一・四三三五

35 (「仏前に) これはしるしばかり捧げさせたまへ。」

## 〔落窪物語〕(三)

多くが「手に持ち高くさし挙げる」意で用いられているが、34・35は「献上する」意を表している。高く挙げて奉ることから派生したものであるが、これらにおいては、まだ原意をとどめ、敬意を払って高く上に挙げて献上するという動作を伴うものと考えられる。

VI、(2) 鎌倉・室町時代の「さしあげる(ささぐ・さしあぐ)」「ささぐ」

は前代と同じような意味領域を示しながらも「さしあぐ」「さしあげる」の古形「が見られるようになる。

36 しら旗ざつとさしあげ、武士ども…〔平家物語〕巻五

37 文もたる便女が参つて「五条大納言殿」へとて、さしあげたり。〔平家物語〕巻四

36のように「あぐ」とほとんど同じ用法で用いられている。また、37でも前代の用例と同じく「頭上高く挙げる」という原意をとどめた用法と言えるだろう。

VI、(3) 中世末期の「さしあげる(ささぐ・さしあぐ)」

『大藏虎明本』においては、「献上する」の意で「ささぐ」の語形のみが見られる。

38 君の御寿命長遠に御ざ候やうに、橘を捧げ申さんと…

## 〔大藏虎明本〕(橘)

VI、(4) 近世・近代の「さしあげる」

近世・近代において、調査した限りでは二・三例しか見られなかった。近代でも「さしあげる」は頻用されていなかったであろうか。

39 おれも窮屈にズボンのままかこまっつて一盃差し上げた。

〔坊っちゃん〕

VI、(5) 「てさしあげる(ささぐ・さしあぐ)」

補助動詞「てさしあげる」が初めて見いだされたのは戦後である。

40 お母さまにご馳走してさしあげよう。〔斜陽〕

同じ太宰でも戦前の作品には見られない。

以上のように「さしあぐ」の発生は鎌倉期であるが、『徒然草』

(二二段)に当時の言葉の乱れとして「かかぐ」が「かきあぐ」、「

「もたぐ」が「もてあぐ」と言われるようになったことがあげられて

いることから考えても「ささぐ」を「さしあぐ」の古形と考えて

よいであろう。よって、奈良時代からその源流が見られ、中世末期

以降用法を定着させたと思われる。また、補助動詞の発生は戦後、

敬語(謙讓)形を含めた全ての受給動詞の中で最も遅い。

## VII、「くれる」の史的変遷

VI、(1) 奈良時代の「くれる(くる)」

『万葉集』には、見当たらない。奈良時代では『万葉集』しか調



べなかつたため、状況の判断は困難である。しかし、小学館『日本国語大辞典』には、『日本書紀 神代』の次のような用例があげられている。

41 「汝が持たる八坂瓊の曲玉を予に授(くれ)よ」

天照大神から素戔鳴尊に対する発話であるが、水戸訓によるものである。他に、「神楽歌一杖」からの例も引かれている。

42 「逢坂を今朝越えくれば山人の我に久礼たる山杖ぞこれ」

「授」を「くる」とする水戸訓は検討を要するものであるとしても、上代に既に「くれる」の古形「くる」が存在したと言えそうである。

Ⅵ、(2) 平安時代の「くれる(くる)」

43 この住みけるところに人やりて宿守に物くれさせて…

(『平中物語』)

44 「…猶いぬからすどもにもく<sup>レ</sup>れて、こめすへたらましを」

(『宇津保物語』)

これらは与えるの意味で、話し手の視点は現代語「くれる」とは異なり、与え手側にあり、現代語「やる」に相当する語であったと言える。

Ⅶ、(3) 鎌倉・室町時代の「くれる(くる)」

前代同様与えるの意で用いられる一方、現代語「くれる」に近づいた用法も見え始める。

45 良き友、三あり。一には、物くる、友。

(『徒然草』百十七段)

46 物ぐさ太郎是をみて、(略)「あまた木の実を、箱の蓋、壇紙

にも入れて、くれよかし、馬牛などに物をくる、如くに、一つに取り具してくれたることよ」

(『御伽草子』)

46の「くる」において、与え手側、受け手側両方の視点に立って授受関係を表現する話し手が見受けられる。

Ⅷ、(4) 中世末期以降の「くれる(くる)」

中世末期から数多くの用例が見え始める。話し手が受け取る側に立った表現である。

47 (山伏↓茶屋)…茶や、ちやをくれよ

(『大藏虎明本』葱山伏)

48 (祖父↓孫)…はやうつれていて、其水をくれてわかうなひてくれさしめ。

(『大藏虎明本』薬水)

これらの「くれる」においては、前時代までに見られた、受け手が与え手よりも目下であるという制約がなくなり、中立的な用法が定着したと、古川(一九九五)は説明している。この話し手の待遇意識及び視点の変化については「くれる」の変遷を一通り見たうえで考察を加えることにする。なお、近世以降、現代語「くれる」と同じ用法で頻用されていく。

Ⅶ、(5) 奈良時代から鎌倉時代の「〜てくれる（〜てくる）」行為の授受関係を表現する補助動詞「〜てくれる（くる）」は見られなかった。

Ⅶ、(6) 室町時代の「〜てくれる（くる）」

49 「何時のころ返事をとりてくれんずるぞ」〔義経記〕卷一

50 子陵ハ我ヲタスケテ天下を治メテクレイカシ

〔中華若木詩抄〕中

話し手に対してある行為をしてけるとい用法が見え始める。

Ⅶ、(7) 中世末期の「〜てくれる（くる）」

現代語と同じ用例が多く見られるようになる一方で、次のような受け手に非好意的な行為をする意の用法も見られるようになる。

51 おのれ祈りころひてくれうが、…〔大蔵虎明本〕蟹山伏

52 いてくれうぞ鶉よ。〔大蔵虎明本〕鶉舞

Ⅶ、(8) 近世・近代の「〜てくれる（くる）」

近世の用例は数が多く、用法が定着するが、とりわけ依頼文において頻用されているのが、特色である。

53 何としたことか。あと損したるか、見てくれよ。

〔きのふはけふの物語〕

54 スウプへみりんと醬油をおとしてよく煮てくんな。

〔安愚楽鍋〕

以上、「くれる」は史的変遷の中で与える側から受け取る側への話し手の視点の移動を伴うものであったことがわかった。また、もう一つ注目すべきは、奈良・平安時代では、「〜ガ…ニくれる（くる）」という構文において、二格には、人称上の制約が見られない点である。43・44の例のように与え手が話し手自身で二格に受け手がくる表現が見られる。それが、鎌倉期以降、二格には、授受関係にある両者で一人称側の人物をおくという制限が加わるようになる。話し手にとって、一人称側か否か、つまり、日本人の自分対相手というウチとソトの区別意識の高まりをこの語の史的変遷が反映しているとも言えよう。

### Ⅷ、「くださる」「〜てくださる」の史的変遷

Ⅷ、(1) 奈良・平安時代の「くださる」

両時代を通して、授受関係を表現する「くださる」は見られない。Ⅷ、(2) 鎌倉・室町時代の「くださる」

この時代から「くださる」が見られるが、これは一語とは認めがたく、「下す」+尊敬の助動詞「る」または、受け身の助動詞「る」と解せる。

55 法皇(略)西國へ院宣をくださされる。〔平家物語〕五

56 (宮八)一首の御詠をあそばひてくださされり。(宮が歌を詠ま

れたあと) 經正、御硯をくだされて…(今度は經正が一首詠む)  
(『平家物語』七)

56は現代語の「いただく」の意に解せると思われる。

Ⅶ、(3) 中世末期以降の「くださる」

57 私に下さる、ものじやとぞんじたれば…

(『大蔵虎明本』茫々頭)

58 食を求めぬは御ざない程に、齋の方へまいつて、ときをくだされう。  
(『大蔵虎明本』東西迷)

59 お手でくださいまし。  
(『浮世床』)

58も「いただく」の意であるが、近世以降は見られず、現代語「くださる」の用法を固定していく。

Ⅷ、(4) 奈良時代から室町時代の「〜てくださいる」

行為の授受関係を表す「〜てくださいる」の用法は見られない。

Ⅷ、(5) 中世末期以降の「〜てくださいる」

60 さいかくな人じやによつて、このやうな分別してくだされた。  
(『大蔵虎明本』引敷聲)

61 いかやうに(略)、おしへてくだされひ。

(『大蔵虎明本』薩摩守)

『大蔵虎明本』で初めて現代語と同じ用法・用例が登場する。近世以降、「〜てくれ」と同じく、とりわけ依頼文に頻用されていく。

62 味をばへ、の味になされてくだされよ。

(『きのふはけふの物語』)

「くださる」は普通体「くれる」より、六世紀、「〜てくださいる」は「〜てくれる」より、一世紀ほど遅れて、発生したと思われる。

中世ごろから用いられ始め、近世から急速に頻用されるようになったようである。

Ⅸ、「もらう」・「〜てもらう」の史的変遷

Ⅸ、(1) 奈良・平安時代の「もらう」

この時代には、授受関係を表現する用法は見られない。

Ⅸ、(2) 鎌倉・室町時代の「もらう」

調査した文献の中で『平家物語』に二例のみ見られただけである。

63 片手にはあらめをひろひもち、片手には綱人に魚をもろふてもち…  
(『平家物語』三)

64 磯に出て網人、釣り人に、手をすり、ひざをかがめて、魚をもらひ…  
(『平家物語』三)

この場面では落ちぶれ果てた人物は読み手にはまだ俊寛とは分らない。彼の他の動作についても敬語表現が見られない。物語の効果を高めるためにも身分関係を示さない「もらう」が用いられている。また身分関係からいうと俊寛が網人より目上になるが、網人から魚

を受け取ることにより、命をつないでいるわけであるから、その授受に対する恩恵的な配慮を意識しているであろう。そのような物の授受に「もらう」が用いられているということは、この語が絶対的な身分関係の意識を持って使われる語ではないことを示していると思われる。

IX、(3) 中世末期以降の「もらう」

65 おもしろおかしく申して一やの隙をもらふた。

〔大藏虎明本〕座禪

66 独りむすめをもたれて人からもらへどもやらひで…

〔大藏虎明本〕賽の目

67 祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、…

〔たけくらべ〕

「もらう」は中世末期から「暇」という具象物でないものの授受をも表し、用法を拡大して、以後盛んに用いられていく。

以上のように「もらう」は、発生は鎌倉期で受給動詞の普通体の中で最も遅いが、中世に急速に発達し、末期には他の受給動詞と同じように用法を拡大し、定着していく。これは待遇意識と関係が深いと考えられる。「もらう」の発生した中世は身分の上下を軸とした古代の絶対敬語から場面に左右される相對敬語へと移り変わっていくという敬語史の大きな転換期でもある。その時期に「もらう」

の発生が見られることは、「もらう」が使用場面に強く依存するという性格を持つ語であり、話し手が受け手を身分の上下意識で捉えていたのが、恩恵関係で捉えるようになったことを積極的に表す語であると言えよう。

IX、(4) 奈良時代から室町時代の「〜ってもらう」

これらの時代を通してまだ行為の授受関係を表現する「〜ってもらう」の用例は見られない。

IX、(5) 中世末期の「〜ってもらう」

68 此かけ物もろくにかけてもらひたい。〔大藏虎明本〕契木

69 仏師と談合いたし、よささうなお仏をつくつてもらはふと存ずる。〔大藏虎明本〕仏師

このように、「〜ってもらう」は中世末期近くに発生したと思われるが「大藏虎明本」で既に、現代と同じように用いられ、発達過程が他に比べ非常に早いと思われる、近世以降、頻繁に用いられている。

X、「いただく」「〜ていただく」の史的変遷

X、(1) 奈良時代から室町時代の「いただく」

現代語「いただく」のような授受関係を表現する用法は見られない。

70 母刀自も玉にもがもや頂きて角髪のなかにあへまかまくも

〔万葉集〕二十・四三七七)

71 ……家の子と選び給ひて勅旨頂<sub>レ</sub>き持ちて唐の遠き境に遣わされ

〔万葉集〕五・八九四)

72 ……とし九十ばかりにて、ゆきをいた<sub>レ</sub>きたるやうなる翁

〔宇津保物語〕

70 のように頭の上に載せる意や、71のように奉載する、ありがたく頭上に載せて頂くという、実際の動作を伴うものである。

X、(2) 中世末期以降の「いただく」

用例の多くが「頭の上に載せる」意であるが、

73 安堵の御教書をいただき、本国へまかりくだるか…

〔大藏虎明本〕賽の目)

この例は頭上という動作を必ずしも伴うものではなく、有り難くいただくと解せる。近世以降、現代と同じ意味で頻用され始める。

74 これは母さんが(略)いただいたのだとさ。

〔たけくらべ〕

X、(3) 奈良時代から近世の「~~~~~いただく」

これらの時代を通して補助動詞「~~~~~いただく」は見られない。

X、(4) 近代の「~~~~~いただく」

明治中期になって現代語「~~~~~いただく」の用法が見られる。

75 巡査さまにみて頂かば、我々も安心。 (〔たけくらべ〕)

76 「…その積もりで勉強していただきたい。」 (〔坊つちやん〕)

授受を表現する「いただく」は普通体「もらう」の発生が遅かったこともあり、調査した本動詞の中で最も遅く発生した語であった。先述したように「くださる」がいただくの意味も表現していたのは、そのためであると思われる。

## XI、まとめ

以上、受給動詞の発生及び機能の変遷について概観し、大まかながら図にまとめた。その結果、受給動詞の発達時期と絶対敬語から相對敬語への敬語意識の転換期が同じ中世期であるという興味深い事実が判明した。逆に言えば、相對的な敬語意識の高まりの中で人々が身分の上下を第一に意識するのではなく、恩恵意識によって個別の場面の中で事柄自体の表現の選択をしようとする姿勢が、受給動詞の頻用を導いたのであろう。また、待遇意識の変化が著しい中世末期に発生した「もらう」は受給動詞の中でも最も相對的な語、つまり場面や、話し手の事柄の捉え方に左右されるという性格を有する語であることも明らかになったと思われる。今一つ受給動詞には数の問題が残る。「やる」の謙讓語が「あげる」「さしあげる」と二語存在することについて少し触れる必要がある。与え手が受け手のために物を贈ったり、行為をすることを表現することは時



〈近代・現代〉

『牛店雑談安愚楽鍋』（秀英出版）

『たけくらべ』（『たけくらべ総索引』笠間書院）

『作家用語索引 夏目漱石』（全一四巻 教育社）

『作家用語索引 志賀直哉』（全五巻 教育社）

『作家用語索引 太宰治』（全六巻 教育社）

『谷崎潤一郎集』（全二巻 現代日本文学大系 筑摩書房）

注

① 授受動詞と呼ぶこともあるが、ここでは、宮地（一九六五）「やる・くれる・もらう」を述語にする文の構造について、『国語学』六三集）による授給動詞と呼ぶことにする。

② 大江（一九七五）・久野（一九七八）では話し手の視点や日本人の主観性から動詞の再検討がなされ、その中で授受表現が論じられている。

参考文献

大江三郎 一九七五『日英語の比較研究——主観性をめぐって——』南雲堂

久野 暉 一九七八『談話の文法』大修館書店

宮地 裕 一九七五『やる・くれる・もらう』の発達の意味について

（『鈴木知太郎博士古希記念 国語学論叢』桜楓社）

宮地 裕 一九八一『敬語史論』（講座日本語学 敬語史）明治書院

古川俊雄 一九九五『授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷』（『広島大学教育学部紀要』）

### 投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場であり、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。第四十七号の締切は一九九七年九月末日、第四十八号の締切は十二月十日厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。採否の問合せには応じられません。